

NHK大河ドラマ『天地人』チーフ演出

片岡

KATAOKA
Hiroshi敬司さんに伺いました

聞き手

苗村 由美
編集委員[writer] 澤田 裕
[photo] 永田 正男

土木工学科を卒業後、NHKに入社された片岡さんに、NHK入社の際の経緯やドラマ制作において土木の経験がどう生かされているのかなどについてお聞きした。

2009年2月24日(火)
NHK放送センター

土木を学ぶなかで

構造的な思考が培われた

——大学では土木を学ばれていたんですね。なぜ土木からドラマ制作の世界に入られたのでしょうか。

片岡——大型建造物をつくりたくて土木を学びました。その一方で映画が中学生の頃から好きで、8ミリフィルムの映画をつくりたりシナリオを書いたりしていました。

それが大学3年生のときニューヨークで本場のショービジネスに触れ、「映像をつくりたい」という長年の夢が勝ってしまったわけです。

——土木で学んだことが生かされたというエピソードはありますか。

片岡——ドラマの世界は途中でぶれることがないように、最初にきちっと世界観をつくっておく必要があります。そのためには構造的な思考が必要で、それは土木を学ぶなかで培われました。たとえば『天地人』だと上杉家の人は春日山に住み、山の頂上から湧き出る清い水が麓に流れ、みんながその水を使って生活する、という世界観を定めています。

それと、図面が読めるのはありがたかったですね。演出家はデザイナーの描くセットの平面図から場面の絵づらを想像して演出プランを立てます。僕は平面図を見れば、すんなり3次元で頭の中に再現できたので、土木に感謝です(笑)。

土木とドラマ制作には
共通点がいっぱいある

——「演出」とはどんなお仕事なのでしょうか。

片岡——撮影現場には100人以上のスタッフがいます。僕の仕事は、その人たちとともに何を指すのかを具体的に示すことです。『天地人』では「気持ち良くひたれる世界をつくらう！」をテーマにしています。悩みがあればこの言葉に照らして判断し、みんなからもこの言葉に沿っておもしろいアイデアを出してもらおうと、物語が膨らんでいきます。

——チーフ演出というのは、いわば大きな作業所の所長さんですね。

片岡——そうですね！ 土木では「現場」という言い方をしますが、ドラマ制作も同じです。

そこで働く人たちがとにかくセッションしていくのが大事なんです。現場を明るく気持ち良く乗せていけばみんなの長所がかけ算されて、いいものが出来上がってきます。

そのためには、相手に応じて言葉を選ばなければいけません。たとえば作曲家と話をするときには「ここはもう少し青っぽく…」など抽象的な言い方が功を奏します。技術スタッフと話をするときには「カメラの位置が3cm高いのでは…」など具体的なアプローチの方が伝わることもあります。相手によってくだわる世界が変わるので、専門的な知識というよりも、相手がどういうことを大事にするのかを理解しておく必要があります。



片岡敬司(かたおか・ひろし)さん プロフィール

1959年東京都生まれ。土木工学科卒業後、1982年NHKに入社。主な演出作品は『元禄繚乱(2000)』、『風のハルカ(2005)』、『グッジョブ(2007)』、『ファイブ(2008)』など。現在、チーフ演出を務める大河ドラマ『天地人』が放映中。

りますね。

——『天地人』では視聴者の心をつかむために、どんな工夫をされているのでしょうか。

片岡——やはり、「気持ち良くひたれる世界をつくらう！」が基本にあつて、歴史がわからない人でも『ハリーポッター』を見る感覚で楽しめるものになりたいと思っています。たとえば上杉家の人の行儀作法はほかの人と違うのですが、所作指導の先生にたたくまいが惚れ惚れするようにとお願ひしたり、俳優さんの魅力を引き出す鬘かづを新しく開発したり、アクションをふんだんに取り入れたりしています。

また、地図の見せ方も工夫していますね。越後からの視点にしたり、衛星写真のように日本列島を見せたりすることで、ドラマにスケール感が出るようにしています。

**ものづくりを尊敬し、
憧れる気持ちを抱き続けてほしい**

——最後に土木を学んでいる学生に向けて、メッセージをお願いします。

片岡——仕事がついせいか、あるいは人間相手に泥臭くやるのが敬遠されるのか、土木と同じようにドラマ制作も志望する人が最近減っています。ものづくりに対する憧れが薄れていることも、この傾向に拍車をかけているのではないかと思います。僕の夢は大型建造物を建てることで、映画『タワーリング・インフェルノ』のビルの設計者、ポール・ニューマンにあげられていました。

ものづくりを尊敬する気持ちは人間のなかに本来あるものです。特に土木は扱っているものが橋や都市など大きなものなので、それだけでも崇高なことだと思います。世知辛い世の中ですから夢も失われがちですが、土木は産業や社会にがちり組み込まれた仕事です。「残るものがつくれている」という思いは、今も変わっていません。若い頃にやってみたいという気持ちを抱いたなら、それを伸ばす志をぜひ持ち続けてほしいですね。

——本日はどうもありがとうございました。